石川県立中央病院

建設の経緯

昭和51年に南新保町（現鞍月東）に移転して以来、県立病院として様々なニーズに答えてきた中央病院は、高度専門医療を提供する本県の基幹病院としての役割を担ってきたが、新築から40年以上が経過し、老朽化の進行や、増改築の繰り返しにより移動距離が延びるなど運営効率の低下が顕著になってきたことから、時代の流れに対応した最新の高度医療を提供する体制を整えることとして、平成22年2月、新病院建設が表明された。

全景

全景（夜景）

エントランスホール

設計の基本方針

高度専門医療の提供を最優先とする病院運営を基本に、
簡素でゆとりある施設づくりを目指す

・救急患者を受け入れる3次救急医療機関としての整備
→救命救急センター、手術部門、集中治療部門とヘリポートをつなぐエレベータを設置

・周産期医療の安定的提供に向けた整備
→総合周産期母子医療センターを手術部門や小児科病棟と同一フロアに配置

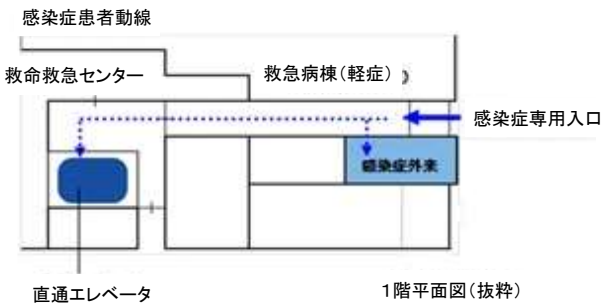
屋上ヘリポート

総合母子医療センターを手術部門や小児病棟と同一フロアに配置

・日々進化するがん治療に対応した整備
→内視鏡手術、腹腔鏡手術などにおいて手術支援ロボットに対応した広い手術室の整備

・新たな感染症への対応をはじめ、感染症の拡大防止を目指した整備
→専用の感染症外来入口や、待合室、診察室を設置し、感染症患者等の動線を分離

ハイブリッド手術室



感染症患者の動線

・患者の治療を重視した「効果的で安全な空間配置」
　　→放射線部門、各検査部門と各診療科の新設室を近接し患者の動線を短くする

・患者・家族の視点に立った「快適な療養環境」の整備
　　→女性特有の病気の患者のプライバシーに配慮し、女性専用外来エリアを設置

女性専用外来エリア

・ユニバーサルデザインの導入など「安全性」への配慮
　　→ユニバーサルデザインを取り入れ、誰でも利用しやすい病院とする。

誰もが利用しやすい病院とするため、障がいを持つ方たちの意見聴取や、実物大模型による使いやすさの検証を行った。

（1）実施設計段階
　障がい者団体を訪問し、図面で内容を説明し、通院時と入院時の2パターンの行動を検討し、設計図に反映した。また、段ボールによる壁と実際のベッドや車いすを用いて、モックアップ検証を行い、病室の大きさなどを確認したり、便器や手すりの向きや位置を決定した。

（2）施工段階
　施工段階では、施工図や模型を元に機器等の高さや大きさをより詳細に検討した。またモックアップにより手洗いやユニットバスなどの使い勝手や、受付カウンターや待合のいす、誘導ブロックなど個別の検証を行い、現場に反映させた。

・ライフラインの確保など「災害に強い」施設づくり
→免震構造を採用し、地震発生後も継続して業務を行える施設整備
→大規模災害発生時に多くの負傷者に対応する受入スペースを確保

・「環境や景観に配慮」した施設づくり
→省エネルギー、省資源による環境への負荷低減につながる技術を効果的に採用

積層ゴムアイソレータ

トリアージ用医療ガス、コンセント
（1階エントランス）

伝統工芸やサイン・アートワークの活用

石川らしさを表現するため、国の指定を受けている九谷焼、加賀友禅、輪島塗、山中漆器、金沢箔、金沢漆器、牛首紬、加賀繍の伝統工芸品8品目を選定し、石川にちなんだテーマを掲げて内装のアクセントとして演出した。

サインは、各部門ごとに加賀五彩でゾーン分けする等の工夫をした。

小児科外来には、病気で通院する子供たちに、安心感与えるためのアートワークを活用した。

伝統工芸ウォール

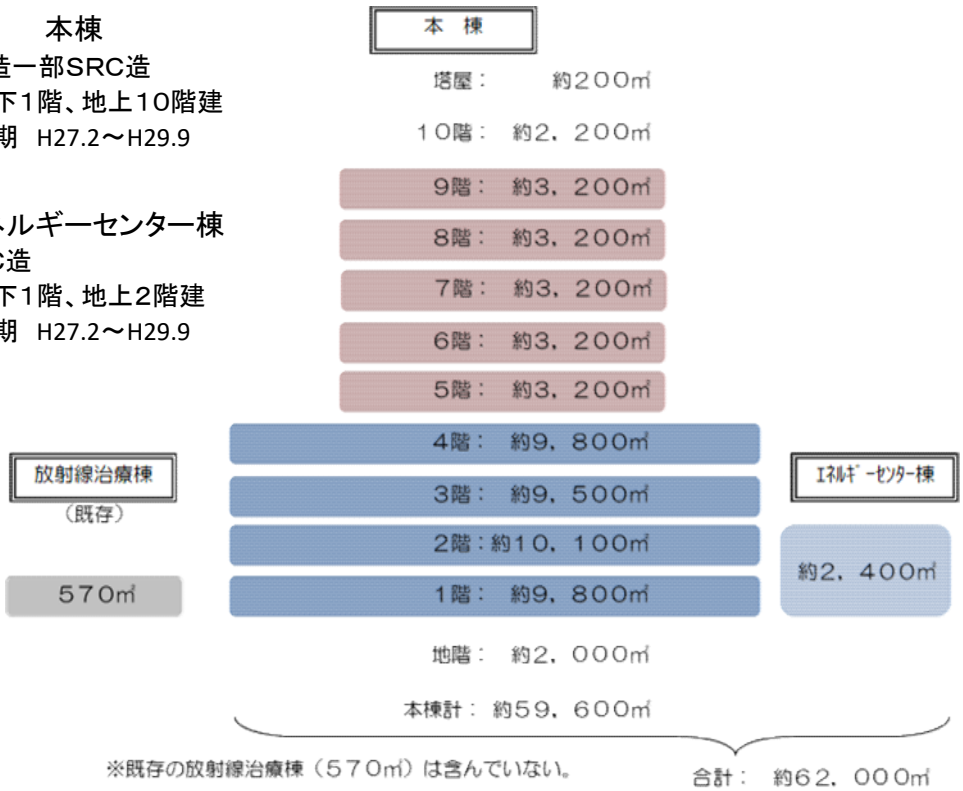
２階　クロユリ

８階　モミジ

小児科外来

本棟
S造一部SRC造
地下1階、地上10階建
工期　H27.2～H29.9

エネルギーセンター棟
RC造
地下1階、地上2階建
工期　H27.2～H29.9



正面玄関大庇

吹き抜け

病室（4床室）

エネルギーセンター